平成 21 年度卒業式式辞

本日、学士の学位をえた 913 名の学部卒業生のみなさん、修士の学位をえた 196 名の大学院修士課程修了生のみなさん、博士の学位をえた８名の博士課程修了生のみなさん、そして６名の特別支援教育特別専攻科修了生のみなさん、ほんとうにおめでとうございます。御来賓の本学同窓会の松原会長ならびに本学後援会の奥村会長、そして列席の理事・副学長、学部長とともにご卒業を心からお祝いいたします。あわせてご家族あるいは関係者のみなさまにも心からお慶びを申し上げます。

学費の負担のためアルバイトに時間を費やした諸君、経済的不況のなかで苦悩されたご家族も少なくないと承知しております。そうした多くの困難を越えて今日を迎えられましたことは、特段の思いではなかろうかと思います。本日卒業あるいは修了される多くのみなさんは、いわゆるバルブ経済のなかで生まれ、思春期はバブルの崩壊、日本の低迷、リストラのなかで育ち、これから出て行く社会は、未だ世界的経済不況の嵐が吹き荒れています。また小学校・中学校など学校時代は、みなさんとは無縁なところで揺れ動いた「教育改革」のまっただなかにありました。世界政治に目を向ければアメリカによる経済的軍事的一極支配のなかでの相次ぐ戦争という時代に育ってこられたのです。こうして振り返りますと、この 20 年あまりは子ども・青年・大人にとっても苦難の時代であったと思います。

大学からみますと修士の修了生のみなさんは 2004 年学部入学、国立大学法人化第１期生であり、学部学生のみなさんは、法人化第３期生であります。みなさんの在学期間は、法人としての第１期といわれる事業期間でありました。未成熟のままスタートした法人化およびそれと重なって展開された「構造改革」は、大学を財政的困難に追いやるだけでなく大学教職員を疲弊させたことは、われわれ大学人だけではなく昨年９月に発足しました新たな政権によっても認識されているところであります。その困難に屈せず今日を迎えられた卒業生はもちろん、みなさんを支援しつづけた教職員の奮闘にも、この場を借りて敬意を表したいと思います。

こうした苦難を経ていま社会に旅立とうとするみなさんに、未来への希望を語りたいと思います。世界は希望に向かって進みはじめています。いまは少し色あせて見えますが、アメリカにおけるオバマ大統領の登場もそのひとつです。彼は昨年４月、プラハにおいて核廃絶の決意を宣言いたしました。これは 1945 年８月６日以後日本と世界の人々が願い続けた核廃絶への思いを、唯一の核使用国アメリカが受け入れた瞬間でした。また世界を支配した新自由主義経済の礼賛も、世界の人々の政治的経済的経験から勢いを失い、新たな経済システムの模索がはじまっています。それは一部の富める者をより富めるよう、一部の人々のみを幸せにする「構造改革」ではなく、人間が育ち、多くの人々が幸せとなる社会への転換を多くの人々が望み行動しはじめたということでしょう。

大局的にみれば日本における政権交代もその流れのなかにあるのです。たとえば新政権は、ヒトが育つことを、親の責任、家族の自己責任とする政策から脱し、「社会がヒト・人間を育てる」と宣言いたしました、それはヒトを使い捨てる社会からヒトが育つ社会への構造転換への宣言だといえるでしょう。子ども手当て、高校授業料の無償化等個別施策への評価は別として、それは「社会が人間を育てる宣言」の政策的表現であり、歴史的には画期的なことであります。新政権が、さらに一歩進んで国際人権規約の中等教育・高等教育の漸進的無償化条項を批准し、大学授業料の減額、給付制奨学金の拡大等高等教育への財政支出を拡大し、みなさんやご家族の苦労が次世代に及ばないことを切に願うものでありますが、これが私たちの前途にある希望です。

この希望を実現するため、本日をもって卒業するみなさんには、責任ある役割をもって社会に参加していただきたいと思います。みなさんは、大学・大学院における学業、研究、課外での活動や学びによって、社会における責任を担う意思と能力を身につけています。しかし新たな環境や新しい人間関係に大きな不安を抱えていることと思います。人間はしばしば、深刻な苦悩に陥ると、自らを孤立に追い込むことがあります。「自己責任」という言葉が支配するなかで育ってきたみなさんにとっては、他人の力を借りても良いとは考えられないのでしょう。近しい友人であっても苦悩をと

もに語り合うことが苦手のように思われます。私も大学教員としてのこの 30 年人間関係に苦悩している学生の光景をみてきました。困難に直面し不安を抱えていてもそれを表現しなければ誰も気付きません。苦悩を表現すれば苦悩を共有し、共感してくれる人はいるのです。あなたの苦悩は、決して孤立したものではありません。

そもそも完全なる人間はいないのです。Nobody　is　Perfect.　一人ひとりは不完全であり、補い合うこと、支えあうことなしには自立できないのです。みなさんは子ども時代、大人たちの「自立しなさい」というメッセージを受け取ってきたと思います。しかし、Nobody　is　Perfect.と考えれば、自立とは、自分だけではできないことがあることを自覚し、頼らざるを得ないところは他者に依存する。他者の援助に対しては感謝を表現すること。逆に他者に支援を求められたときにはためらわず援助すること、そのような他者との関係をきづくことによって「自立」は可能となるのであります。その意味で「自立」とは共同的なものであるということを、つよくみなさんにお伝えしておきたいと思います。

みなさんが卒業後、苦悩や挫折に直面し、他者への依存の必要を感じたとき、母校である和歌山大学も依存の対象としてぜひ思い起こしてください。和歌山大学は、大学の使命として在学生の支援はもちろんのことでありますが、本日ご臨席の同窓会の先輩方や後援会の方々とも協力し卒業生の生涯にわたる支援の仕組みを強めていくつもりです。そのことを最後にお伝えし式辞といたします。

平成２２年３月２５日

国立大学法人和歌山大学長
山　本　健　慈